



TITLE:

<學界展望>中國における勤工儉學運動研究の動向

AUTHOR(S):

森, 時彦

CITATION:

森, 時彦. <學界展望>中國における勤工儉學運動研究の動向. 東洋史研究
1982, 40(4): 779-793

ISSUE DATE:

1982-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153839>

RIGHT:

中國における勤工儉學運動研究の動向

森 時 彦

- 一 資料集出版までの経緯
- 二 その意義と価値
- 三 最近の研究動向

最近、中國ではフランス勤工儉學運動に関する研究が、かなりの隆盛をみせている。大部な資料集が二種類も同時に出版されていることも、その傾向を裏づけるに足る。いずれもまだ完結したわけではないが、とりあえず目にするのできる部分について簡単な紹介を試みることによって、この方面における研究の現状を展望するとともに、中國の近・現代史學界がかかえている課題の一端をかいまみる一助ともしたい。

二種の資料集とは、一つは張允侯、殷筱彝、李峻晨編『留法勤工儉學運動』第一冊（一九八〇年十月 上海人民出版社 以後『留法』と略稱）であり、いま一つは清華大學中共黨史教研組編『赴法勤工儉學運動史料』第一冊、第二冊上・下（一九七九年十一月、一九八〇年十一月 北京出版社 以後『赴法』と略稱）である。

兩者ともに、當時の原資料を運動の経過に則して網羅的に排列することによって、フランス勤工儉學運動の全貌を明らかにしようという意圖のもとに編まれた資料集という點では、ほぼ軌を一にするものではあるが、その出版に至るまでの軌跡にはまったく異なるものがある。その相違は、同時に中國におけるフランス勤工儉學運動研究の二つの淵源をも象徴しているように思われるので、少し詳しく紹介してみよう。

一 資料集出版までの経緯

前者、『留法』の編者は、すでに『五四時期期刊介紹』全三冊、『五四時期的社團』全四冊といった、われわれ五四運動研究者必携の工具書を編集した中心メンバーとして周知の張允侯、殷筱彝兩氏に、若手研究者の李峻晨氏が加わった顔ぶれである。張允侯氏は、現在、中國社會科學院近代史研究所、殷筱彝氏は中共中央馬克思恩格斯列寧斯大林著作編譯局（以後中央編譯局と略稱）に在籍している。李峻晨氏は本名李俊臣、中國革命博物館に勤務している。これら三つの機關が、資料収集の上できわめて有利な條件を備えていることはいうまでもない。

しかし、出版に至るまでの過程は決して平坦ではなかった。前言に述べるところでは、編集作業はすでに一九六〇年に開始されていた。また、聞くところによると、そもそもの發端はさらに二年前の一九五八年にはじまるともいう。當時も中央編譯局にあった殷筱彝氏は、折から高揚しつつあった社會主義教育運動の一環としての「勤工儉學」運動に呼應するために、新聞、雜誌から「勤工儉學」關係の記事を百篇餘り選び、十餘萬字の資料集を編んだ。それは何

長工の『勤工儉學生活回憶』（一九五八年十一月 工人出版社）執筆の動機に一致する。

その後、一九六〇年に至り、中央編譯局の中國革命史組（組長殷絳、副組長張允侯）は、五四運動四十周年を記念して、『五四時期資料叢刊』八種の出版を決定した。その中に、留法勤工儉學運動も專題の一つに選ばれたわけである。十數人のスタッフを結集して開始されたこの事業も、しかしわずか一年にして、中央宣傳部の命令によって中止のやむなきに至ったという。スタッフの多くは『國際勞動運動』の編集にまわされ、あるいは他の機關に配置換えになる人もいたとさく。

最初に資料収集をはじめた『五四時期的社團』だけは、以後も近代史研究所で編集が續行され、一九六二年に脱稿、出版社にわたったが、紙型までできた段階で再び干渉を受けて挫折した。一九七九年四月、漸やく日の目をみたこの書の前言に、「林彪、四人組、さらに『四人組』と密接に關係し、一貫して『理論權威』を以て自任していたあの人物の壓迫によって、すでに紙型までできていたにもかかわらず、本書は十數年もずっと放置されてきた」（あの人物とは康生をさす―筆者）と述べているのは、その間の事情を如實に物語るものである。

『五四時期的社團』を雛形と受けとってさしかえないならば、『五四時期資料叢刊』八種は、『五四時期期刊介紹』の資料篇といった性質のもので、主に期刊（新聞、雜誌）の記事をそのまま、題目別に排列することをめざしていたようである。

したがって、『留法勤工儉學運動』も、當初は、新聞、雜誌だけを對象に資料収集が進められていたのではないかと思われる。この

点では、後述の『赴法』の方がむしろその原型に近いといえる。一九七八年に再開された編集作業も、まずはこの方面から着手されたであろうことは想像にかたくない。しかしながら、『五四時期期刊介紹』編集のために、當時中央編譯局に集められた歴大な新聞、雜誌資料は、文革中に中央檔案館に移管、收藏されることになり、収集した本人ですら容易に閲覧できない状態におかれてしまった。

その結果、編集作業は、『五四時期期刊介紹』編集の経験をたよりに、資料収集の第一歩からやりなおすことになった。十數年の空白によって、資料散逸等、マイナス要因が數多く生まれたであろうことは疑いないが、しかし同時に政治に翻弄されたといわれる十數年の経験が、この資料集を當初計畫されていたものより、より充實したものに育てあげた面も、見のがしてはならない。

『五四時期的社團』と比較してみると、各章ごとに「編者説明」を加えるなどの體裁だけは酷似しているものの、その編集方針にはかなりの違いが感じられる。まず第一に、既述のように、『五四時期的社團』の方は、資料収集の對象が、新聞、雜誌にはば限られていたのに對して、『留法』の方は、同じく期刊を基礎にしながらも、さらに日記、書簡、檔案資料にまで採取範圍を廣げているのである。この違いは、社團と留學運動という對象そのものの性格の違いが反映しているものと受けとることもできるが、より直接的には編者のとり組む姿勢の違いに起因しているように思えてならない。第二に、當事者の回憶錄の資料としての價值に對する見方が、かなり變化していることが感じられる。『留法』の「前言」（六一頁）に、「……當事者たちが執筆した回憶錄を除いては、この事件（フランス勤工儉學運動）は、一、二の中國留學史の本に簡單な記載があっ

ただけである。このため、フランス勤工儉學運動の全貌を深く理解することは大變困難であった」と述べているのは、單に從來の資料不足の状況を慨嘆的に指摘するためだけではないだろう。『五四時期的社團』では、各章の末尾に回憶錄を収める努力がなされ、前言でも「これらの回憶は、各社團の研究、理解に貴重な資料である」と、その価値を高く評價しているのである。むしろ『留法』の方が、回憶錄をまったく無視しているというわけでは決していないが、それ自體、フランス勤工儉學運動の通史をなしている六十數ページの「前言」において、回憶類を資料としては一切用いていないこと、また回憶錄を第四冊の附録としてしか収めない豫定であるところに、はつきりと回憶錄に第二義的價值しか賦與していない姿勢がうかがえる。

ともあれ、政治的要請にこたえるため出發した『留法』の編集は、十數年の「浩劫」をへて、第一巻の出版にこぎつけたわけである。

一方、清華大學中共黨史教研組の劉瑩、朱育和、趙原璧三氏の編集にかかる『赴法』は、勤工儉學運動研究のいま一つの淵源に端を発している。周恩來總理の逝去に對する民衆の追慕の念が、「四人組」打倒へのひき金になったことはすでに周知のところである。この潮流ののって、周恩來研究あるいはより正確には周恩來贊美の研究がさかんになり、新聞、雑誌をにぎわせたが、毛澤東に對する評價が定まっていなない情況の下では、抗日戰爭から解放後にかけての期間とはかく扱いにくいといった心情が働いたのか、勢い青少年時代の周恩來に研究が集中した。その中でも、五四時期が特に興味をそそったのも、當然の成行きであろう。業餘研究者の懷恩氏が、

傳記『周總理的青少年時代』（一九七九年四月 四川人民出版社）さらにはその資料集ともいへば『周總理青少年時代詩文書信集』上・下全二卷（一九七九年十二月、一九八〇年八月 四川人民出版社）などを矢つぎ早に發表したのは、そのような雰圍氣をもっとも典型的に傳えている。

その結果、この時期の關係資料も次々に新たなものが紹介されるに至った。南開學校の同人雜誌『敬業』、校誌『校風』等からは、南開大學周恩來研究室が、周恩來の文章を選び、いち早く『文選』を出版している。しかし、われわれにとつて重要なのは、やはり天津『益世報』の記事といわなければならない。フランスに留學した周恩來が『益世報』に寄稿した記事は、五十六編、約二十五萬字にのぼる。一九七九年に全編復刻されたこれらの資料の中で、『留法勤工儉學生之大波瀾』、「勤工儉學生在法最後之運命」という二編の長大な連載記事及び「旅法華人拒絕借款之運動」などの記事が、フランス勤工儉學運動、とりわけそのクライマックスである一九二二年の三大鬭争（二八鬭争、中佛秘密借款反對鬭争、リヨン中佛大學鬭争）の内實を知るうえで、如何に貴重なものであったかは、多言を要しない。

青少年時期の周恩來研究が、一定の蓄積をみ、研究者たちの興味が一歩歩きをはじめると、その關心は多く、フランス勤工儉學時期に集中した。さらに進んでは本末顛倒がおこり、むしろ勤工儉學運動そのものの方に、研究の重點をかえる人々が現われてきたのも不思議ではない。その原因としては、いま述べた新資料の出現もさることながら、この時期に周恩來が自己をマルクス主義者として確立していったという、きわめて魅力的な事實が認められるとともに、

また再検討をせまられつつある初期中國共產黨史とも密接に關連する問題をこの時期がはらんでいた事實も擧げられよう。

最初、青少年期の周恩來研究をすすめていた南開大學周恩來研究室の王永祥氏、天津市博物館の廖永武氏等の人々が、相繼いで、勤工儉學運動の研究に着手しはじめたことは、この情況をよく反映している。『赴法』の編者たちが、前記の人々と同じ道を辿ったかどうかは、跡づける材料を缺くが、『赴法』そのものはその第一巻概述の劈頭に、『益世報』における周恩來の二大長編連載記事を配し、それを以てこの資料集の總論に充てていることが象徴するように、周恩來研究に源を發する研究の系譜に組み入れられるべきものといえるであらう。

さらに編者の劉瑩、朱育和、趙原璧三氏は、清華大學中共黨史教研組に所屬し、日本式に言えば教養科目としての中共黨史を擔當している先生方である。このような立場からしても、また『赴法』が、黨史ときわめて關係の深い資料を収集している『中國現代革命史資料叢刊』の一種として出版されている事情からしても、三氏が中共黨史の重要な一環として勤工儉學運動にとり組んでいる姿勢をうかがうことができる。かかる中共黨史からの要請と周恩來研究の蓄積が結びついたところに、この『赴法』が登場したといってもさしつかえないであらう。

二 その意義と價值

二種類の資料集が生みだされてきた背景を、長々と述べてきたが、むろん動機論ですべてを説明しようという用意からではない。根元をたぐっておくことは、果實の出來具合を見るうえで、決して

無意味なことではないと考えるからにすぎない。

さて、その果實についていえば、なんといつても、これだけのしぼったテーマについて、『留法』の方は三千ページ以上、『赴法』の方も二千ページ近くのスペースを豫定しているだけに、まさに斷簡零墨のことばそのままに、現在のところ考えつくすべての可能性を追求して資料収集をした跡が、ありありと見てとれる。

とはいえ、ここに提供された多數の資料を仔細にながめてみると、われわれ外國人にとっては初公開のものであつても、中國國內では必ずしもそうでないものも多い。例えば、『新民學會會員通信集』所載の蔡和森と毛澤東の往復書簡は、湖南における運動の組織化と、渡佛後の蔡和森が到達した建黨思想を知るうえで、またとない貴重な資料であつて、筆者自身、數年來一讀できる日を鶴首の思いで待ちのぞんできたものである。しかし、中國國內の學者にとっては、それほど新鮮味はなく、すでに中國人民解放軍海軍學院政治理論教研室編『新民學會資料選輯』（一九七九年四月刊）、中國現代革命史資料叢刊『新民學會資料』（一九八〇年九月刊）などで、その全體を容易に見ることができるとのである。

また、『赴法』に收められた趙世炎の五通の書簡にしても、一九二二年六月に中國少年共產黨が結成される前後の情況を傳えるものであるが、中國ではすでに一九六二年七月に『趙世炎烈士資料匯編』（正編・補編合計三六四頁の大部な資料）が出版されており、そこに收められた七通の中、少共にふれている五通を選擇したにすぎない。同じく、旅歐中國共產主義青年團の内情を知るのに不可欠な「旅歐中國共產主義青年團（中國社會主義青年團旅歐之部）報告第一號」および「旅歐中國共產主義青年團章程」が全文明らかにさ

れたことも、歓迎すべきことではある。しかし、これも前者はすでに『趙世炎烈士資料匯編』に収められているばかりではなく、最近では中共中央黨校黨史教研室編『中共黨史參考資料』第一冊（一九七九年十月刊）をはじめ、數點の參考資料に收録済みである。

他方、『留法』の口繪に收められている多數の寫眞、京師警察廳檔案（『留法』第一冊九四～九九頁等）、華法教育會檔案（同四六三～四六九頁等）、華法教育會宛の紹介狀、照會狀（同四三六～四六二頁）等は、編者の資料収集にかけた執念を傳えてあますところがない。中國各地に散在する勤工儉學體験者を尋ねまわり、第二檔案館（南京）の膨大な民國時代の檔案をかきわけて、漸くさがし當てたと推察されるこれらの資料を前にする時、われわれは本國史ならではという羨望の感にとらわれざるをえない。この結果、われわれが利用できるようになった資料は飛躍的に増加し、今後のフランス勤工儉學運動の研究は、これを基礎とすることなしには、一歩たりとも進められなくなつたといつても、過言ではない。

この意味で、筆者は資料集そのものの價値を高く評價することに躊躇するものではない。しかし、筆者がより特筆大書したいのは、資料集というかたちを借りて表現されている（あるいはこのかたちでしか表現しえない）編者たちの革命神話に對するプロテスト精神である。

筆者は、二年の中國滞在中に、『第一手資料』^{『ファーストハンド資料』}ということばをしばしば耳にしたことがある。書きことばでは、「原始資料」ということばが普通に使われているようであるが、いずれも譯せば、第一次資料ということになるのであろうか。ともかく、第一次資料に對する「信仰心」の厚さは豫想以上であつた。『留法』、『赴法』い

ずれの編者も、その前言において、「原始資料」の収集に對する強い自負心を表白している。

この現象の背景として、われわれは解放以後の中共黨史あるいは中國現代史のあり方に一瞥を與えておく必要があるだろう。現政權の政策上、林彪、「四人組」による歴史の歪曲に對しては、ここ數年來大いに喧傳がなされてきたが、實際はその根はもっと深いところにあるのではないだろうか。

一つの例を擧げてみよう。『黨史研究資料』第六期（一九七九年七月五日）の中國革命博物館黨史陳列部「黨史陳列の幾箇問題」が傳えるところによると、安源炭礦ストライキの指導者をたたえる歌謡の一つとして「直到一九二一年、忽然霧散見青天、有箇能人毛潤之、打從湖南來安源……」（圈點は筆者）という歌が一九五三年に紹介されたが、これがまつたくの偽作であつたという。事は、萍鄉縣委宣傳部の彭江流が『黨史資料』第三期に「安源路礦工人俱樂部的歷史」なる文章を發表した時に、一九二二年安源ストの直後に出版された『勞工記』という歌謡本を典據としてこの毛澤東を稱える歌を紹介したことから始まつた。それが、最近になって、上海師範大學（現華東師範大學）黨史教研組が『勞工記』には、「直到一九二一年、忽然霧散見青天、有箇能人李隆到、年齡只有二十四……」（圈點は筆者）という歌詞しかないことを發見したのである。

しかし、當の彭江流は頑として非を認めず、『黨史研究資料』第十一期（一九七九年九月二十日）に反駁文を發表した。その主旨は、第一に李隆到（李立三）を毛潤之にかえたのは、「老工人」からの聞き書にもとづいて『勞工記』の「誤まり」を正したにすぎない、第二に安源ストの實質上の指導者は毛澤東であつたのだから、

この訂正こそ歴史事實にもっとも忠實な措置だ、ということである。「わたしが、これを改めたことを口實に、李立三の安源労働運動初期における役割を過度に強調しようとすることは、あきらかに公正でもなく、史的唯物論の態度に合致しないものでもあり、一つの極端から別の極端に走ることになる」。

この善良なる「史的唯物論者」にしても、おそらくは氷山の一角にすぎないであろう。革命の元勳たちが嚴として存在するかぎり、かれらに阿諛して歴史資料をねじまげる不心得な試みが發生するのは避けられないであろうし、また元勳たち自身も、意識的、無意識的を問わず、自分の立場を美化する記録を好む性向を有しているであろう。とりわけ、いったん政争がおれば、遠い過去にまでさかのぼって政敵の罪を暴きたてようとするような政治風土の中では、それは已むをえない自己保身の姿勢といえるかもしれない。党内鬭争で生きのこるためには、歴史の眞實よりもむしろ、自己の革命性と無謬性を「證明」してくれる歴史が必要なのである。

このような土壌の上に、さらに老人特有の頑固なまでの自説に對する執着を考慮にいれなければならない。筆者も、ある老幹部を訪ね、聞き書を試みたことがあるが、うかつにもその場で記憶ちがいを指摘したのがわるく、「おまえはわざわざ日本から、わしのまちがいをあげつらいに來たのか」と激怒をかい、冷汗をかいたことがある。権力の座にあるかれらが執筆ないしは提供する回憶なるものが、歴史資料としてはいかに扱いにくいものになるか、ある程度了解していただけるであろう。

もちろん、歴史主義の立場をふりかざして、回憶などというものは、所詮、個人の偏見にもとづくもので、要はそこから歴史家がい

かにして資料的價值をひきたすか、その手腕にかかっていると、つき放すことは容易である。しかし現實には、革命の元勳たちのことを金科玉條のごとくあがめ、あまつさえそれにあわせて資料を改竄し、しかもこれこそ「史的唯物論」の立場だと居直るような「歴史家」が一部に横行してきたのである。

このような中共黨史、中國現代史の誤まったあり方に對して、「第一手資料」萬能論がどこまで批判としての有効性をもちうるかは残された課題であるが、少なくとも勤工儉學運動にかぎっていえば、當事者たちの回憶が「第一手資料」の發掘で急速に威信を失墜しつつあることはまちがいない。それは場合によっては、正面きつた批判よりも、より決定的な打撃を與えることになるかもしれない。

勤工儉學運動の回憶録としてはもっともすぐれたものと評價されてきた何長工の『勤工儉學生活回憶』にしても、やはり偏見と誤解にもとづくところが多く、しかもあきらかな作爲もあることが、「第一手資料」によって明白にされつつある。問題點は多岐にわたるが、ここでは二點だけにしぼって述べ、その一端を明らかにしておきたい。

勤工儉學運動の提唱者、李煜瀾（石曾）は、その政治的立場（無政府主義者から國民黨右派へ）の故に、解放後は「帝國主義、軍閥官僚の走狗」として、一顧の價值もない人物と葬りさられてきた。政敵をその生涯にわたって黒一色で塗りつぶしてしまふのは、何も「四人組」の專賣特許ではなかったのである。

何長工もこの物指で、提唱者たちの動機をはかり、蔡元培については「社會福祉事業の性格を帯びるもの」とやや寛大に扱っている

ものの、李石曾、吳稚暉に至っては、「みなフランスの資本家の走狗で、かれらの目的は、フランスの資本家のために洋奴を養成するか、あるいは自分たちの無政府主義のためになんにんかの信者を増し、政治的資本をふやそうとしたにちがいないかったのだ」ときめつけている。

筆者自身も、このような二面的な見方については苦言を呈したことがある（岩波新書『フランス勤工儉學の回想』二二三―二四ページ）が、なにぶんにも限られた資料を以てしては、何長工の主張を論破することはできなかった。ところが、『留法』の編者たちは、華法教育會の檔案資料をはじめ、多くの第一次資料を収集、分析した結論として、張繼、吳稚暉らと李石曾との間には、同じ無政府主義者といっても、勤工儉學運動への関わり方には相違があったことを明らかにしている。「李石曾も實名行爲の一面がなかったとはいえないけれども、かれが儉學、勤工儉學及び華工教育の提唱と組織といった面で、たしかに少なからぬ仕事をしたという、この一点は肯定しなければならない」。

この第一次資料にもとづく評價の轉換が効を奏したのであろうか、今年（一九八一年）六月、李石曾の故郷高陽縣では、縣文教局と文化館の主催で「留法勤工儉學運動資料展覽」が開催され、李石曾の功績を顕彰したといわれる。この展覽はその後新資料を追加しながら、七月には勤工儉學預備學校のあった保定で、さらに八月七日―十月五日の二箇月間、北京の中國革命博物館で觀覽に供された。勤工儉學の提唱にかぎられているとはいえ、「平反」が、無政府主義者から國民黨右派となり、共產黨に敵対した人物にまで及ぼされたことは、日本人的感覚からすれば當然のことのようにみえて

も、中國歴史學界においてはやはり異例のことといえるのではないだろうか。

第二の點は、何長工の渡佛時期に關する動かぬ證據が提供されたことである。「勤工儉學生活回憶」で、何長工の敘述には、渡佛の年を明記はしていないが、あきらかに一九一九年末のことという印象を与えようとする作爲が見られる。また、實際、『中國青年』一九五八年第五期の「革命長輩談勤工儉學」と題する回憶談では、「われわれはフランス郵船で一九一九年末に上海を出航し、一九二〇年初めフランスのマルセイユに着き、すぐに汽車に乗りかえてパリに到着した」と斷言しているのである。

にもかかわらず、筆者は「勤工儉學生活回憶」の譯注（岩波新書一七六ページ）において、あえて何長工の意を無視し、三つの證據を擧げて一九二〇年末ではないかと考證した。時間の差はわずか一年、六十餘年後の今日からいえば、とるにたらない誤差であるともいえる。が、筆者は、この一年の差に固執したい。

なぜなら、何長工が、『中國青年』の座談會でも、『勤工儉學生活回憶』でも、また最近執筆した同工異曲の數編の回憶錄でも、一九二一年における勤工儉學生の三大鬭争を自から體驗したものととして描いていることに大いに疑惑を感じるからである。「革命長輩」としては、自からの青年時代を語るに際し、勤工儉學生の光輝ある鬭争をすべてたたかぬいた歴戰の鬭士であつたことを誇りたいであらうし、またそれが黨歴、革命歴の上からも望ましいのであらう。ところが、この話のつじつまをあわせるためには、何長工はどうしても、一九一九年末に中國を離れていなければならないのである。もし一九二〇年末だとすると、一九二二年二月二十八日の二八

鬭争に参加している可能性はきわめて少なくなる。またよしんば参加したとしても、ほんのわずかの勤工儉學期間も経ていない情況からみると、その行動は附和雷同以外の何ものでもなくなってしまうのである。

『留法』、『赴法』いずれもが提供している『時事新報』一九二〇年十二月十五日の記事は、あきらかに何長工にとって不利である。この日、第十七次（最終）勤工儉學生の團がチリ號に搭じて上海を離れたが、その名簿の中に「何坤」という名が見える。『勤工儉學生活回憶』で、何長工が行動を共にした友人として、たびたび觸れている高風、毛遇順（何長工は毛羽順と記す）の二人も、同じグループに列記されていることから考えると、「何坤」が何長工であることは、まず動かしがたい。

もちろん、この一事から断定するわけではないが、何長工の回憶は、二つの資料集とつき合わせて讀めばよむほど、信頼できないことが明らかになってきた。しかも、單なる記憶ちがいにとどまらず、自からの立場をよくするための作爲がまま見受けられるのである。回憶録とはそんなものだと言ってしまうまでもだが、その回憶録が中共黨史ないしは中國現代史を構成する資料の中で大きなウェイトを占めてきたのが實狀なのである。

そして、その結果が政敵を全面的に抹殺する「黒一色」論と、自己の革命性を無條件に賛美する「紅一色」論に歸結するとすれば、革命の元勳たちの手になる回憶録の災いは甚大だといわなければならぬ。筆者の考えでは、何長工の回憶なども、歴史事實に結論を下すための資料としては今後は絶対に用いるべきではなく、廣く當時の雰囲気を知るための材料、いわば小説のようなものとしてのみ

扱うべきではないかと思う。⁽⁷⁾

『留法』、『赴法』二つの資料集が、「第一手資料」にこだわることによって、いかに小さな規模にすぎないにしても、革命神話の一つに破産宣告を下したことは重視してよい。これを突破口として、中共黨史全體にわたって神話の時代を終結させる研究が定着することを期待してやまない。それにしても、一九五〇年代末期、當時の政治運動に奉仕するために開始されたフランス勤工儉學運動の研究が、二十數年後の今日、同じ立場から執筆された政治家の「神話」をうちくたく役割を果たすことになったのは、皮肉といえば皮肉である。

三 最近の研究動向

以上、二つの資料集がもつ意義を考えてきた。つぎにこの資料集を頂點とする勤工儉學運動研究の概況を、だいたい一九七九年以降にしばって見ておきたい。

この二年餘の間に、フランス勤工儉學運動を五四運動の一環としてとらえ、かつその發展が中國共產主義の一流を生みだしたとする觀點は、ほぼ定着したようである。『留法』、『赴法』いずれの編者も、その前言でこの觀點を完全に支持している。また、五四運動六十周年記念で出版された中國社會科學院近代史研究所『五四運動回憶錄』上・下が六十ページ餘りを勤工儉學運動の回憶にさき、さらに中國社會科學院現代史研究室・中國革命博物館黨史研究室共編『一大・前後——中國共產黨第一次代表大會前後資料選編』一・二が、周恩來の報告をはじめ、中共旅歐支部關係の回憶を、やはり六十ページ餘り採録していることは、この觀點が相當の市民権を得

ていることを示している。

五四時期における一つの重要な研究分野として公認されるにつれて研究者の数がまし、個別問題への分散が見られるようになってきたのも、最近の傾向といえる。その方向は、ほぼ二つに分かれる。

その一つは地方化といってよいだろう。勤工儉學生をもっとも多く出した四川省では、『四川文史資料選輯』第二十三輯（一九八〇年十一月發行）が勤工儉學運動の特集に當てられて、黃里州、李季偉という二人の四川出身者が記したかなり長い回憶錄、李季偉が一九二一年九月十日救済を求めて認めた「爲四川留法勤工儉學學生會上四川省政府書」、そして「趙世炎生平史料」（全國政協「文史資料選輯」第五十八輯よりの轉載）などを収めている。また四川省社會科學院歷史研究所の張至皋氏は、「留法勤工儉學與四川青年學生」（一九八〇年九月脱稿）と題する草稿をタイプ印刷で發表している。

これは、主に成都『國民公報』と四川出身者からの聞き書で材料として、四川での運動の組織化にはじめてまとまった記述を與えている。惜しむらくは、勤工儉學運動全體の一般的な通史をも兼ねているために、散漫な印象を免がれない。西南師範學院の彭承福氏も、「趙世炎同志在留法勤工儉學期間」と題する草稿をまとめている。『趙世炎烈士資料匯編』を主な資料として、四川出身の趙世炎がフランスにおける共產主義組織の結成で果たした役割を論じているものである。

四川に次いで多くの勤工儉學生を出した湖南でも、同様の研究が始められているものと推察されるが、筆者は寡聞にして多くを知らない。ただ、最近相繼いで出版されている『新民學會資料』（一九八〇年九月 人民出版社）、『五四時期湖南人民革命鬭爭史料選編』

（一九七九年八月 湖南人民出版社）、『向警予文集』（一九八〇年五月 湖南人民出版社）などで、急速に資料整備がすすめられ、『蔡和森傳』（一九八〇年九月 湖南人民出版社）、『向警予傳』（一九八一年五月 湖南人民出版社）では、かなり丹念に留佛時期の活動があとづけられている。『回憶蔡和森』（一九八〇年三月 人民出版社）、『懷念蔡和森同志』（一九八〇年四月 湖南人民出版社）も留佛時期の回憶を何編か収めている。特に蔡和森がフランスで受容したボルシェビキ的組織論は、その先驅性が高い評價を受け、地元の趙光白「蔡和森的建黨思想和建黨活動」（『湖南師院學報』一九八〇年第四期）をはじめ、戴緒恭「蔡和森的建黨思想和活動」（『華中師院學報』一九八〇年第二期）、劉健清・張洪祥「蔡和森在中國共產黨創建中的地位」（『南開學報』一九八〇年第三期）などが、それぞれ『新民學會會員通信集』所載の書簡を主な材料として專論している。

天津では、相變らず周恩來が中心であって、周恩來研究と勤工儉學運動研究が密接に結びついている。

周恩來同志青年時代在津革命活動紀念館は、『周恩來青年時代』と題する不定期刊の研究資料を出版している。その第一期（一九八〇年五月）では、周恩來と同船であった謝樹英と中國少年共產黨に参加した吳琪の回憶、王慶民氏による潘世綸訪問記などが收録されている。

南開大學周恩來研究室から生みだされてくる作品も、留佛時期を扱ったものが多い。最近の『天津文史資料選輯』第十五輯（一九八一年五月）には、中國共產主義青年團旅歐支部に参加したことのある江澤民、施益生二人の回憶が掲載され、先の吳琪の回憶が轉載さ

れているほか、周恩來研究室メンバーの手になる「周恩來青少年時代記事」、そして在佛の中共黨員第一號とされる張申府（綏年）に對する聞き書などが含まれている。最後の聞き書は短かいものではあるが、フランスにおける共產主義運動を深く研究しているメンバーたちが行なったものであるだけに、急所をついた問答が進められていて、非常に興味深い。鄭健民・楊世釗・王金堂「旅歐期間周恩來同志建立革命統一戰線の重大貢獻」（『南開學報』一九八〇年第二期）、孔繁豐「旅歐期間周恩來同志國家主義派的鬭爭」（『天津日報』一九八〇年三月二十四日）、いずれも『赤光』所載の周恩來論文を読みこんで、當該問題を論述したものである。

いま一つの傾向は、勤工儉學運動史の中でも特に、フランスにおける中國人共產主義運動に關心が集中してきたことである。

黨史の立場からする勤工儉學運動の研究が従来きわめてなおざりにされてきた原因としてはいろいろ考えられようが、當事者たちの回憶以外ほとんど見るべき資料がなかったということが、まっ先に指摘されよう。しかしその後、『赤光』がかなりまとまった形で紹介され、不揃いであった『少年』が補充されるとともに、研究の糸口が確實にたぐりよせられてきた。

この記念すべき『赤光』については、鄭健民・王金堂「周恩來同志與『赤光』——讀周恩來同志一九二四年的理論文章」（『天津日報』一九八〇年三月三日）、林大昭・胡華「周恩來同志與『赤光』雜誌」（『百科知識』一九八〇年第二期）、懷恩・森時彦「赤色之光 永放光芒——簡介周恩來同志發表在『赤光』上的文章」（『新聞研究資料』一九八〇年第三輯）などが、周恩來の文章に焦點をあわせて、その紹介を試みている。もっとも、蔡和森の建黨思想の場合もそう

であったようにいまの中國では往々にして、このように同一テーマについて大同小異の論文が何本も發表されることが少なくない。この現象はよくいえば、研究者の層が厚いことを示し、知識の普及に役立っているということになるのであろう。しかし、われわれから見れば、時間と紙の浪費といった感は免がれたい。

フランスでの共產主義組織を系統的に論述したものとしては、吳時起「試論中國共產黨旅歐總支部の歴史地位」（『哈爾濱工業大學科學研究報告』第一二四期 一九七九年九月）が、比較的早い。吳時起氏は、『趙世炎烈士資料匯編』と張申府の回憶を主要な論據に、陳獨秀の委託を受けて渡佛した張申府が、一九二一年初め、パリで共產黨小組を組織したことを闡明している。最初のメンバーは、張申府と劉清揚の二人だけであったが、同年二月には國內ですでに共產黨小組に入っていた趙世炎、陳公培（吳明）の二人が、陳獨秀の紹介狀を携えてパリに到り、參加した。同じく三月には、周恩來が張、劉の紹介で參加し、メンバーは五人になったという。

しかし、この小組は、國內組織との連絡がなかった上に、張申府の力量不足の故に、ほとんど發展せず、活動も停滯していた。一九二二年六月に周恩來、趙世炎らが結成した中國少年共產黨は、「パリ小組」というこの狭く美しい天地を突破」して作られた新たな組織である。しかも、中國少年共產黨は成立當初は、「黨」の性格をもっていたのであって、中國社會主義青年團旅歐之部（旅歐中國共產主義青年團）と改名した時点で、「團」にかわった。大體以上のようになり、吳時起氏は主張している。

これに對して、南開大學周恩來研究室の王永祥氏は「關於「旅歐中國少年共產黨」幾個問題的商榷」（『南開學報』一九八〇年第四期）

を執筆して、まっ向から吳時起氏の説に反対している。中國少年共產黨創立の主要メンバーである周恩來、趙世炎がともに小組に参加していたこと、またその創立準備に在歐黨員たちが連絡をとりあっていたことなどから考えて、小組の役割を過小評價することはできないというのである。また、趙世炎の書簡に「われわれはすでに青年團の内幕は、少年共產黨にはかならないことを認定している」ということばがあることを理由に、王永祥氏は中國少年共產黨が當初から「團」の性格を有していたと反論する。

パリ共產黨小組、旅歐中國少年共產黨、旅歐中國共產主義青年團という系列の組織について、このような論争が起るのも、蓋しこれらについての資料が整備されつつある状況を反映しているのだといえる。他方、中國共產黨旅歐支部に関しては、中國でも手づまり状態にあるようである。

王永祥氏には別に、『旅歐總支部』光輝歷程片斷』正・續（天津師範學報一九八〇年第二期、第三期）という論文がある。ここでいう「旅歐總支部」は、まえがきでわざわざ「旅歐の黨團組織を統稱する」とのと、断わられている。また前述の論文で、共產黨旅歐支部については一切ふれていないことから考えても、この問題については保留の態度をとっているように見うけられる。

これに對して、『赴法』の編者である劉楚、朱育和、趙原璧の三氏は、「旅歐中國黨團組織の建立經過」（『黨史研究』一九八一年第一期）において、パリ共產黨小組、中國少年共產黨の性格については、ほぼ王永祥氏と同じ見解をとりながら、中國共產黨旅歐支部の成立に關しては、吳時起氏と同じように、一九二二年秋から冬にかけての時期に成立したという舊説を墨守している。その論據は、お

そらく『黨史資料』一九五三年第一期に掲載された廖煥星「中國共產黨旅歐總支部」という文章であろう。廖煥星のこの回憶録は、全體的に見て、何長工の回憶録よりは當時の共產主義組織について詳しくかつ正しいところが多いように見うけられる。したがって、最近（一九七八年以降）中國の多くの論者が、これによって中國共產黨旅歐支部の一九二二年秋または冬成立説を主張していることに、ある程度の了解はできる。

しかしながら、それがいまのところ回憶以外によるべき資料を用意していないように察せられると同時に、中國の學者が精力的に収集している「第一手資料」中の関連資料を丹念に讀めばよむほど、一九二二年成立説に對する疑念がましてきているが故に、筆者自身は自身の假説（一九二三～二五年の間に成立したとする）になお執着したい。その論據については別稿を構想しているのでそれに譲るが、ただ一つ、回憶類をすべて排して「第一手資料」のみで通史を構成している「留法」の前言が、やはり中國共產黨旅歐支部の成立時期については明記を避けて慎重な態度をとっていることは、中國でも、まだ決め手がない段階にあることを暗示している。

總じていえば、勤工儉學運動の研究において、なお安易に回憶類の資料によりかかる風潮が多くのことではあるものの、二つの資料集の出版を契機にして、そのような風潮に對する反省と「第一手資料」による論述を重視する氣運が定着しつつあることはたしかである。もちろんそれはまだ考證學の段階にとどまるものにすぎないが、避けては通ることのできない重要な第一歩ではあると思う。

聞くところによると、王永祥、張洪祥兩氏は黑龍江人民出版社から、勤工儉學運動の通史を間もなく出版される豫定であり、また

『赴法』の劉基氏は、今年（一九八一年）五月、中佛文化交流の一環としてフランスに招かれ、一カ月にわたり勤工儉學のフランス側資料を調査、収集してこられたそうである。それらの成果も含め、埋もれた「第一手資料」を満載して、『留法』と『赴法』が一日も早く完結することを期待してやまない。

註

(1) 八種とは以下のものである。

- 一、十月革命對中國革命的影響
- 二、五四前的新文化運動
- 三、五四運動的經過和發展
- 四、五四時期的社團

五、留法勤工儉學運動

六、五四時期的社會改良主義運動

七、馬克思主義和反馬克思主義

八、馬克思主義和工人運動的結合、中國共產黨的成立

(2) 本名は劉五全。成都の化工研究所に勤務するかたわら、同僚倪德宣氏などの協力を得て、周恩來研究に没頭した。その發端は、やはり成都における「四五運動」にあると聞いている。南開大學卒業という経歴も、當然關係があるだろう。

(3) 『中國現代革命史資料叢刊』では、このほか、『南昌起義資料』（一九七九年七月 人民出版社）、『馬林在中國の有關資料』（一九八〇年四月 人民出版社）、『一大前後——中國共產黨第一次代表大會前後資料選編』第一輯、第二輯（一九八〇年

七、八月、人民出版社）、『新民學會資料』（一九八〇年九月 人

民出版社）、『省港大罷工資料』（一九八〇年九月 廣東人民出版社）、『西安事變資料』第一輯（一九八〇年十月、人民出版社）等、續々と出版されつつあると聞が、『省港大罷工資料』、『南昌起義資料』を除き、他はすべて内部發行で、残念ながら日本には入ってきていない。

(4) 参考に供するため、兩者の章構成を紹介しておく。

『留法』

第一章 中國知識分子赴法勤工儉學前的旅法華人教育

第二章 留法勤工儉學運動的興起（以上第一冊）

第三章 在法勤工儉學情況

第四章 勤工儉學運動的挫折

第五章 二八運動

第六章 反對中法大借款

第七章 爭取進入里大的鬭爭

第八章 二八運動以來的總述和總括

第九章 被迫歸國的留法勤工儉學生的活動

第十章 留法勤工儉學運動的餘波

第十一章 馬克思主義與留法勤工儉學生中先進分子的結合

第十二章 旅歐中國黨團組織的建立及其活動

附錄 留法勤工儉學生所撰寫的回憶錄

『赴法』

第一卷 概述

第二卷 緣起

一 留法儉學會・留法勤工儉學會・華法教育會

二 戰時華工與赴法勤工儉學

三 工讀主義、工讀互助團與赴法勤工儉學 (以上第一冊)

第三卷 歷程 (上)

- 一 勤工儉學運動高潮的形成
- 二 勤工儉學生分批赴法
- 三 勤工儉學狀況
- 四 二・二八運動 (以上第二冊上)

第四卷 歷程 (下)

- 五 反對中法秘密借款的鬭爭
- 六 爭取開放里昂中法大學的鬭爭
- 七 被驅逐回國之勤工儉學生的呼吁
- 八 留在法國之勤工儉學生的狀況及活動
- 九 反對帝國主義共管中國鐵路的鬭爭
- 十 關於旅歐中國共產主義組織的若干文獻資料 (以上第二冊下)

第五卷 論著 (勤工儉學生當時所寫的反映馬克思主義思想運動的論文、通信和調查報告)

第六卷 回顧 (以上第三冊)

以上、兩者 of 的章構成を概観してみて氣附くことは、『留法』の方がひたすら勤工儉學運動に收斂させる編集の姿勢をとっているのに對し、『赴法』の方は、第二卷で華工問題、工讀互助運動をも遠景として配置していることである。

(5) この二つの文書について、筆者は、周恩來逝去後に發見されたというように述べたことがある (『旅歐中國共產主義青年團の成立』—『東方學報』第五十二冊所收六六二ページ) が、これは完全にまちがっていた。

なお、この二つの文書は手書のもので、不鮮明な部分が多く解讀には相當骨が折れる。ところが、『赴法』の編者には、やや慎重さを缺く處理の仕方が見られる。例えば、『赴法』第二冊下、八四三ページ、下から四行目の「其後代表團由重・輔同志復我們一信」の條は、重・輔と讀んでいる點で、筆者が前出拙稿を執筆した際と同じ讀み方をしているのではあるが、『趙世炎烈士資料匯編』と『一大前後』がともに不明字とし、『中共黨史參考資料』が老・輔としているように、非常に解讀しにくい文字であるのだから、資料集と銘うつ以上、注でも施して問題があることを指摘しておいてしかるべきではないだろうか。

(6) 二種の資料集によって、われわれが新たに利用できるようになった資料は以下の通りである。頭に○印のあるものは、『留法』にのみ收録されているもの、△印は『赴法』にのみ收録されているものである。

〔單行本〕

『旅歐教育運動』(一九一六年 フランス刊)

○『法蘭西教育』(一九一三年十月刊)

○『華法教育會・留法儉學會・留法勤工儉學會』(一九一九年増訂再版本)

『留法儉學會報告書』(一九二〇年華法教育會廣東分會刊)

〔新聞、副刊〕

長沙『大公報』 成都『國民公報』

『晨報』 『新聞報』

『時事新報』 『申報』

○『民國日報』 ○『上海晚報』

○『新申報』

時事新報副刊『學燈』

△民國日報副刊『平民』

〔雜誌〕

『旅歐雜誌』

『新民學會會員通信集』

『旅歐周刊』

○『江蘇教育公報』

○『新生活』

△『少年世界』

△『工人旬報』

このほか、本文に示した檔案類、また日記、書簡なども新たなものが多いが、一一は記さない。

(7) かく言う筆者自身も、『フランス勤工儉學運動小史』上・下（『東方學報』第五十冊、第五十一冊）において、何長工の回憶錄にひきずられて、少なからぬ誤まりを犯している。とりあえず、次の二點だけでも訂正しておきたい。

第一は、一九二一年二月二十八日の所謂二八鬭争の性格をやや單純に考えすぎたことである。拙稿では、フランスの不況で失業した勤工儉學生總體と、かれらへの援助を打切った中佛教育會及び中國公使館との對立とのみとらえていた。しかし、天津『益世報』の周恩來記事が傳えているところでは、二八鬭争をめぐって、勤工儉學生は二派に分裂した。モンタルジの蔡和森を中心とする新民學會、李維漢などを中心とする工學世界社のメンバーたちは、工學主義は幻想にすぎないとして、直

△『國風日報』

華工民國日報副刊『覺悟』

『新民學會會務報告』

『湘江評論』

○『華工雜誌』

○『北京高等師範學校周刊』

○『工讀』

△『湘潮』

接行動で公使館から援助をちとるべきだと主張した。二八鬭争の主體となった「請願派」である。「モンタルジ派」と稱されることもある。

これに對して、勤工儉學互助社、勞動學會、勤工儉學討論社、勤工儉學第一組、勤工儉學互助團などの諸團體は、「請願は工學主義に背叛する舉動だ」とみなし、勤工儉學生の「自力更生」を主張して、勤工儉學者同盟を結成した。「請願派」に對する「勤工儉學派」である。その中心メンバーは趙世炎、李立三、陳延年、陳喬年らであった。

この兩派の對立と、二八鬭争前後の理論鬭争そして統一は、勤工儉學運動史のクライマックスともいうべきものである。いまは詳しく述べる餘裕がないが、現在の筆者の見方は、『留法』前言一五―一九ページの所説にはば一致する。併せて参照していただきたい。

第二は、第一とも關連するが、蔡和森が二八直前に、工學世界社のメンバーと連帶して「工學互助社」を結成したという敘述である。これも天津『益世報』により、その事實はなく、勤工儉學派の一團體名と混同したにすぎないことがわかる。

いずれも、すでに證明したように、二八鬭争に直接かわらなかつたと思われる何長工が、おそらくは、誤まつた傳聞にもとづいて敘述した部分を、筆者が無批判的に信用した結果にほかならない。

ほかにも、資料集とつきあわせてみると、冷汗ものの所が多見うけられる。他日、訂稿を草して全面的な補訂を加えたいと思つてゐる。

(8)

この問題については、『近代史研究』一九八一年第四期の資料索引によると、いま一つ胡慶雲「旅歐中國少年共產黨究竟是哪個組織、還是團的組織」(『思想戰線(軍政學院)』一九八〇年第九期)という專論があるらしいが、筆者未見。

(附記)

拙文で利用した文獻の中には、中國國內でしか見ることのできないものがいくつもある。一一の名稱を列記することは省くが、自由な閲覧を許された各大學、圖書館に謝意を表す。

(一九八一年十一月記)